

# Asia Indicators

発表日: 2022 年 11 月 4 日 (金)

## 中国・民間版 PMI も景気減速を示唆 (Asia Weekly(10/31~11/4))

～当局のゼロ・コロナ戦略への拘泥が足かせとなり、製造業、サービス業ともに 50 を下回る～

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹 (TEL: 03-5221-4522/050-5474-7495)

### ○経済指標の振り返り

発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
10/31(月)	(韓国)9月鉱工業生産(前年比)	+0.8%	+0.9%	+1.5%
	(中国)10月製造業 PMI	49.2	50.0	50.1
11/1(火)	(韓国)10月輸出(前年比)	▲5.7%	▲3.0%	+2.7%
	10月輸入(前年比)	+9.9%	+6.9%	+18.6%
	(中国)10月財新製造業 PMI	49.2	49.0	48.1
	(豪州)金融政策委員会(政策金利)	2.85%	2.85%	2.60%
	(インドネシア)10月消費者物価(前年比)	+5.71%	+5.99%	+5.95%
11/2(水)	(韓国)10月消費者物価(前年比)	+5.7%	+5.6%	+5.6%
11/3(木)	(中国)10月財新サービス業 PMI	48.4	--	49.3
	(マレーシア)金融政策委員会(政策金利)	2.75%	2.75%	2.50%
11/4(金)	(フィリピン)10月消費者物価(前年比)	+7.7%	+7.1%	+6.9%
	9月輸出(前年比)	+7.0%	--	▲2.0%
	9月輸入(前年比)	+14.1%	--	+26.2%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

### [中国]～政府統計のみならず、民間統計も幅広く企業マインドは景気減速を示唆する難しい状況が続く～

1日にS&Pグローバルが発表した10月の財新製造業PMI(購買担当者景況感)は49.2となり、前月(48.1)から+0.9pt上昇するも3ヶ月連続で好不況の分かれ目となる水準で推移している。足下の生産動向を示す「生産(48.3)」は前月比+1.0pt上昇するも引き続き50を下回る推移が続くなど減産圧力がくすぶるほか、先行きの生産に影響を与える「新規受注(48.7)」は同+1.6pt、「輸出向け新規受注(49.6)」も同+4.1pt上昇しているものの、ともに50を下回る水準で推移するなど内外需双方で回復力に乏しい展開が予想される。また、一服感が出ていた商品市況が再び底入れしていることを反映して「投入価格(50.7)」は前月比+2.9pt上昇して3ヶ月ぶりに50を上回る水準となるなど、企業部門にとって調達価格が急上昇している一方、「出荷価格(48.9)」は同+2.2pt上昇するも調達価格の上昇分を製品価格に充分転嫁出来ていない様子もうかがえる。なお、「購買量(50.7)」は前月比+2.8pt上昇して3ヶ月ぶりに50を上回る水準となるなど、将来的な生産拡大を見越した原材料需要を活発化させる動きがみられるものの、減産圧力がくすぶるにも拘らず「完成品在庫(50.1)」も同+0.7pt上昇して在庫が積み上がっている様子うかがえる上、受注動向を勘案すれば増産に向けた動きが具現化する

かは不透明と捉えられる。さらに、「雇用 (48.7)」も前月比+1.0pt 上昇するも依然 50 を下回る推移が続くなど調整圧力がくすぶっており、回復力の乏しい家計消費を取り巻く状況が大きく好転することは期待しにくいと捉えられる。

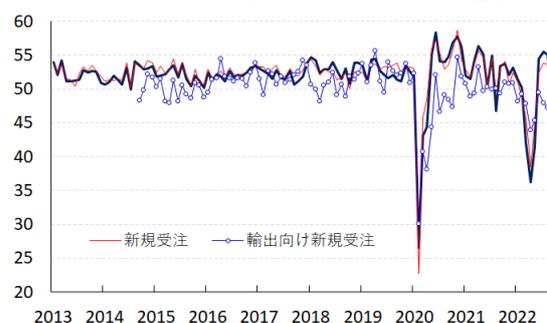
3日にS&Pグローバルが発表した10月の財新サービス業PMIは48.4となり、前月(49.3)から▲0.9pt 低下して2ヶ月連続で好不況の分かれ目となる水準を下回っている。足下の経済活動に下押し圧力が掛かっているほか、先行きの経済活動に影響を与える「新規受注(49.4)」は前月比+0.7pt 上昇するも引き続き50を下回る水準で推移している上、「輸出向け新規受注(47.1)」は同▲4.0pt 低下して2ヶ月ぶりに50を下回る水準となるなど、内外需双方で受注動向が弱含んでいる。なお、内外需双方で受注が弱含む動きがみられるにも拘らず、「雇用(51.4)」は前月比+2.9pt 上昇して10ヶ月ぶりに50を上回る水準に回復するなど雇用の底入れが進む動きがみられるなど、家計消費を下支えする可能性はある。ただし、当局は依然『ゼロ・コロナ』戦略に拘泥する姿勢を変えていない上、足下では感染動向の悪化を理由に行動制限を再強化する動きをみせており、先行きの企業マインドに一段と下押し圧力が掛かる可能性はくすぶる。

図1 CN 財新製造業 PMI の推移



(出所)S&P グローバルより第一生命経済研究所作成

図2 CN 財新サービス業 PMI の推移

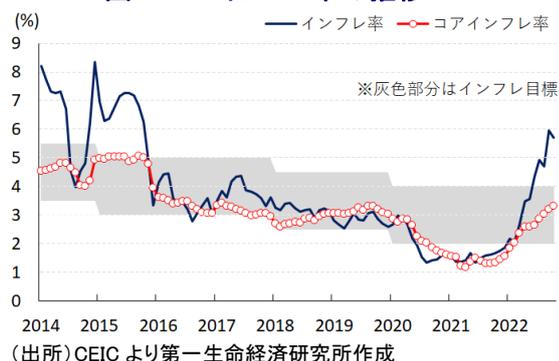


(出所)S&P グローバルより第一生命経済研究所作成

### [インドネシア]～生活必需品の物価はまちまちながら、ルピア安も重なり全般的にインフレ圧力が強まる展開～

1日に発表された10月の消費者物価は前年同月比+5.71%となり、前月(同+5.95%)から伸びが鈍化したものの、引き続き中銀の定めるインフレ目標(3±1%)の上限を上回る推移が続いている。前月比は▲0.11%と前月(同+1.17%)から2ヶ月ぶりの下落に転じており、原油をはじめとする国際エネルギー価格の高止まりを反映してエネルギー価格は上昇が続く一方、食料品価格の上昇の動きに一般感が出るなど生活必需品の物価はまちまちの動きをみせている。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+3.31%となり、前月(同+3.21%)から伸びが加速しているものの、中銀の定めるインフレ目標の域内で推移している。前月比は+0.16%と前月(同+0.30%)からペースは鈍化するも上昇が続いており、エネルギー価格の上昇に伴う輸送コストの上振れに加え、国際金融市場における通貨ルピア安による輸入物価の押し上げも重なり幅広く財価格に上昇圧力が掛かっているほか、感染一服を受けた経済活動の正常化の動きを反映してサービス物価にも上昇圧力が掛かる動きがみられるなど、全般的にインフレ圧力が強まっている。

図3 ID インフレ率の推移



### [韓国]～中国経済の減速懸念の高まりを受けて輸出及び鉱工業生産への下押し圧力が一段と強まる展開～

31日に発表された9月の鉱工業生産は前年同月比+0.8%となり、前月(同+1.5%)から伸びが鈍化している。前月比も▲1.8%と前月(同▲1.4%)から3ヶ月連続の減少で推移している上、中期的な基調も減少傾向で推移するなど頭打ちの動きを強めている。鉱業部門の生産に底打ち感が出る動きがみられる一方、製造業での生産低迷の動きが生産全体を下押ししており、主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連や電気機械関連のほか、自動車や船舶など輸送用機械関連など幅広い分野で生産が下振れしており、こうした動きを受けて鉄鋼をはじめとする金属関連や化学製品関連など原材料の生産にも下押し圧力が掛かるなど、全般的に生産調整圧力が強まっている。こうした動きを反映して平均設備稼働率も74.5%と前月(75.3%)から▲0.8pt低下して11ヶ月ぶりの低水準となるなど、世界経済の減速懸念の高まりが生産活動の足かせとなっている。

1日に発表された10月の輸出額は前年同月比▲5.7%となり、前月(同+2.7%)から丸2年ぶりに前年を下回る伸びに転じている。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比も5ヶ月連続で減少している上、中期的な基調も減少傾向で推移するなど頭打ちの動きを強めている。最大の輸出相手である中国での『ゼロ・コロナ』戦略への拘泥による景気減速やサプライチェーンの混乱を受けて中国向け輸出が大きく下振れしている上、世界経済の減速懸念の高まりも輸出の足かせとなっている。一方の輸入額は前年同月比+9.9%となり、前月(同+18.6%)から伸びが鈍化している。前月比も2ヶ月連続の減少で推移している上、中期的な基調も拡大ペースが鈍化するなど頭打ちの兆候がうかがえる。国際商品市況の上振れの動きは輸入額を押し上げる一方、輸出の低迷を受けた素材及び部材などに対する需要が弱含んでいることが輸入額を下押ししている。結果、貿易収支は▲66.96億ドルと7ヶ月連続の赤字で推移している上、前月(▲37.78億ドル)から赤字幅は拡大している。

2日に発表された10月の消費者物価は前年同月比+5.7%となり、前月(同+5.6%)から再び加速している。前月比も+0.26%と前月(同+0.29%)からわずかにペースは鈍化するも2ヶ月連続で上昇しており、国際的なエネルギー資源価格の高止まりを反映してエネルギー価格は上昇基調が続く一方、上昇基調が続いた食料品価格に一服する動きがみられるなど、生活必需品の物価はまちまちの動きをみせている。他方、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+4.2%と前月(同+4.1%)からわずかに加速しており、インフレ率とともに中銀の定めるインフレ率(2%)を大きく上回る推移が続いている。前月比も+0.36%と前月(同▲0.05%)から2ヶ月ぶりの上昇に転じており、エネルギー

一価格の上昇に伴い輸送コストが押し上げられていることに加え、金融市場における通貨ウォン安による輸入物価の押し上げも重なり幅広い財価格に上昇圧力が掛かりやすくなっているほか、感染一服による経済活動の正常化の動きを受けてサービス物価も押し上げられるなど、全般的にインフレ圧力が強まっている様子がうかがえる。

図4 KR 鉱工業生産の推移

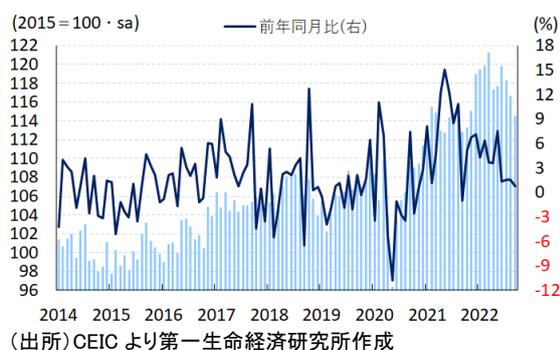


図5 KR 貿易動向の推移

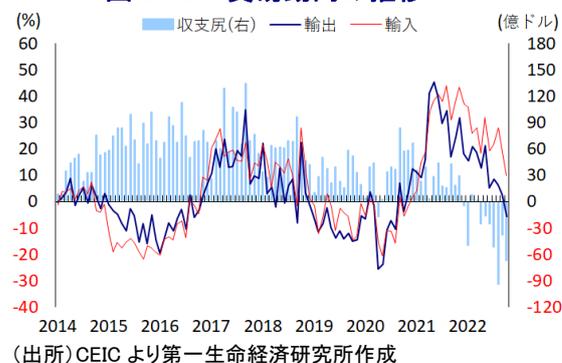
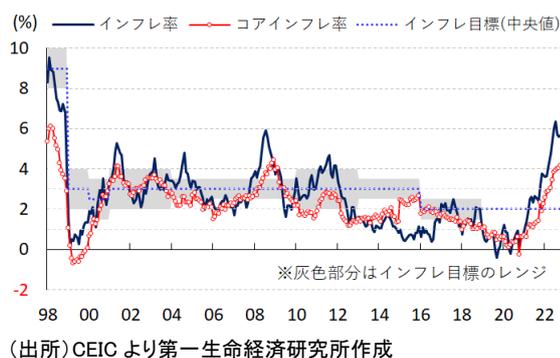


図6 KR インフレ率の推移



### [フィリピン]～生活必需品のみならず全般的に物価上昇圧力が強まり、インフレ率は14年弱ぶりの水準に～

4日に発表された10月の消費者物価は前年同月比+7.7%となり、前月(同+6.9%)から加速して2008年12月以来となる高い伸びとなっている。前月比も+0.94%と前月(同+0.43%)から上昇ペースは加速しており、原油をはじめとするエネルギー資源の国際価格の高止まりを反映してエネルギー価格は上昇が続いているほか、穀物などの商品市況の高止まりの動きは食料品価格を押し上げるなど、生活必需品を中心にインフレ圧力が強まっていることが影響している。なお、食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率も前年同月比+5.9%と前月(同+5.0%)から加速しており、インフレ率とともに中銀の定めるインフレ目標(2～4%)を上回る推移が続いている。前月比も+0.95%と前月(同+0.43%)から上昇ペースが加速しており、エネルギー価格の上昇に伴う輸送コストの上振れに加え、国際金融市場における通貨ペソ安を受けた輸入物価の押し上げも重なり幅広く財価格が押し上げられているほか、感染一服による経済活動の正常化が進むなかでサービス物価も押し上げられるなど、全般的にインフレ圧力が強まっている。

また、同日に発表された9月の輸出額は前年同月比+7.0%となり、前月(同▲2.0%)から3ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じた。当研究所が試算した季節調整値に基づく前月比は2ヶ月連続で拡大す

るなど底打ちを示唆する動きがみられるものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど頭打ち傾向が続いた流れが大きく変わる状況とはなっていない。財別では、主力の輸出財である半導体など電子部品関連の輸出に底打ち感が出る動きがみられるほか、商品市況の高止まりを反映して鉱物資源関連の輸出額も押し上げられる一方、電気機械関連や機械製品関連のほか、農産品関連の輸出額が下振れしていることが輸出全体の重石となっている。一方の輸入額は前年同月比+14.1%となり、前月（同+26.2%）から伸びが鈍化している。前月比は2ヶ月ぶりの減少に転じるなど一進一退の動きをみせている上、中期的な基調は減少傾向に転じるなど頭打ちの動きを強めている。電子部品関連の輸出の堅調さを反映して素材及び部材関連の輸入は比較的堅調な推移をみせる一方、機械製品関連や農産品関連のほか、鉱物資源関連など幅広く輸入が下振れして輸入全体を下押ししている。結果、貿易収支は▲48.21億ドルと前月（▲60.21億ドル）から赤字幅が縮小している。

図7 PH インフレ率の推移



図8 PH 貿易動向の推移



以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。